

## 日光街道唯一の塞

# 栗橋関所

### 関所の成り立ち

天正18(1590)年関東に入国した徳川家康は、江戸を外敵から守るために、必要に応じて街道筋の要衝に関所を設けた。江戸北方の日光道中と利根川が交差する渡河点には房川渡しが設けられ、その地先に関所が設置された。

### 栗橋関所

栗橋関所は通称であり、正式には「房川渡中田関所」と言われている。江戸時代の関所は、江戸防衛や大名統制のための政治的・軍事的な拠点としての機能を有していた。関所手形に基づいて通行人を監視し、「入り鉄砲に出女」と言われるように江戸へ持ち込まれる鉄砲と、江戸から出る女性の通行を厳しく取り締まった。栗橋関所は交通の要衝として重視され、約250年間江戸北方の警護を担っていたが、江戸幕府が終焉し、新政府に移行後の明治2(1869)年には廃止された。



▲栗橋関所復元模型（久喜市立郷土資料館蔵）

### 関所番士

栗橋関所に勤務し、通行改めを行っていたのが関所番士であった。江戸後期には、加藤、足立、富田、島田の四家が、代々関所番士を勤めた。

### 房川船橋

普段は船で渡る利根川も、将軍が日光東照宮へ参拝する際には、臨時に船橋がかけられた。河川敷を含めた川幅188間(約342m)に船を並べ、その上に板と砂を敷き、虎綱で川岸から固定し、道のようにしたもの。その長さは151間(275m)であった。



▲中古風俗 日光御社参栗橋渡し船橋之図（久喜市立郷土資料館蔵）

## 日光街道7番目の宿場町

# 栗橋宿

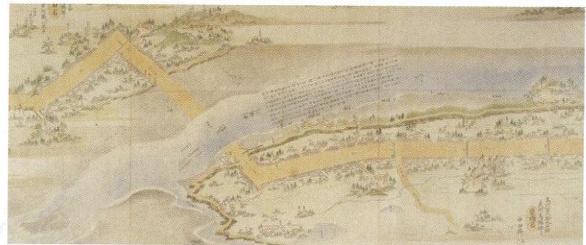
### 栗橋の始まり

古代・中世の栗橋区域は下総国葛飾郡に属した。平安時代末期から戦国時代にかけての区域は、下総国下河辺荘と呼ばれ、古文書等から現在の栗橋区域にもその名が残る高柳・伊坂・狐塚の地名を確認することができる。

### 栗橋宿の成り立ち

栗橋は、もともと下総国栗橋（現在の茨城県五霞町）にあった。しかし、江戸時代初頭、「利根川の瀬替え」の一環として行われた赤堀川（現在の利根川の本流）の開削に起因した大洪水に見舞われたため、村民が上河辺新田（現在の栗橋）に移り住み、当初の地は「元栗橋」と名乗るようになった。

この新しい栗橋は、元栗橋の池田鴨之介と並木五郎平の両名が、関東代官伊奈忠次の指揮により開発したまちを起源としており、池田氏・並木氏を含む56名が、それぞれ街道の東側と西側に移住した。関所の開発に合わせ正式に宿場が成立し、池田家は代々本陣役を務め、並木家も脇本陣の役割を担い、栗橋宿の発展に大きく貢献した。



▲五海道分間延絵図及び見取絵図 卷2：日光道中分間延絵図  
東京国立博物館 (TNM Image Archives)

### 栗橋宿の構成

栗橋宿は、日光道中の宿場として設置され、利根川を挟んだ中田宿と合宿で伝馬を勤めた。

天保14年頃は南北10町30間(1,134m)、家数404軒、人口1,741人(男869人・女872人)、本陣、脇本陣のほか、旅籠屋25軒で、現在の埼玉県域の日光道中の宿場では、杉戸に次いで規模は小さかった。

栗橋宿の特徴は、利根川の房川渡しを控えており、農業の他に旅人の休泊を受ける旅籠屋や食べ物を商う茶店などの諸商人が多くいた。また、栗餅を商う店が2軒あり、栗橋宿の名物であった。



▲日光道中絵図・栗橋宿部分（国立公文書館蔵）